2022年度　入学試験問題

国　語

（第3回）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、
　解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

毎年、梅雨があけると、私たちは、蒸し暑い日本の夏に打ちのめされる。といっても、それは悪いことばかりでもない。この蒸し暑さが稲の成長を助け、豊かな生態系をもつ日本列島をつくりあげた。日本の自然の力強さは、この蒸し暑い夏に支えられている。

日本の社会は、この自然とともに暮らした人々がつくりあげた。社会はけっして人間の力だけでつくられたものではない。自然と人間との共同作業がひとつの社会をつくりだす。自然と人間とがさまざまに関わりながら、その社会の特質をつくり、その社会の人々の精神をつくりだしていくのである。

とすると、日本列島に展開した社会は、どのような特質をもっているのだろうか。その特質は、今日の変わりゆく歴史のなかで、どんな役割や作用をはたしていくのだろうか。

ところで、これまで、日本の人々の特質というと、しばしば返ってくる言葉に、①集団主義的性格というものがあった。しかし、私は、このように［A］してしまうことに疑問をもっている。というのは、私には、②日本の伝統的な精神は、もっと多層的なものだったのではなかったか、という思いがあるからである。

日本にかぎらず、村落共同体であれ、職人や商人の共同体であれ、共同体の一員として暮らした歴史の記憶をもっている社会の人々は、人間は他者との関係のなかで生きている、という考え方をもっているものである。それは、けっして日本だけの特徴ではない。なぜなら、共同体のなかでは、自然や他の人々との相互的な協力関係をとおして、一人ひとりが暮らしてきたのだから。この点では、人間は相互関係を結んだ「集団」の一員として、現実の世界をつくりだす。

仮に、このような現実が生み出した考え方を「集団主義」と呼ぶのなら、私は、それが日本的な精神のなかに流れていることを、否定しようとは思わない。しかし、それだけなら、共同体の歴史をもっている人々に共通する精神であって、けっして日本的な特質にはならない。もしも伝統的な日本的特質に焦点をあてるのなら、私たちは、日本の風土が育んできた徹底した個人主義、というもうひとつの精神をみなければならないし、「集団」の一員であることと、徹底した個人主義とが、矛盾なく共存してきた、精神の多層性をa シヤに収める必要があるだろう。

「つきつめれば、生きるも死ぬも吾一人」、これもまた、伝統的な日本的精神である。ふと気がつくと、孤独な存在でしかない自分がみえる。しかもその自分の本性は、まとっているものをすべて剥がしてしまえば、無であり、空でしかない。この精神の先にあるものは、③徹底した個人主義である。

日本的な精神とは、この個人主義的な心情と、共同体の一員として関わり合いながら暮らして

いる現実とが、矛盾しないところにあるのではないか、と私は思っている。なぜ矛盾しないのかといえば、現実の世界に暮らす自分と、現実を超えた奥にある根源的な人間の存在とは、生きる次元を異にしているからである。その結果、共同体の一員として生きながら、同時に孤独に生きる自分をみつめるという、精神の多層性をもつことができた。

今日の日本の社会の問題点は、この伝統的な精神の多層性がわからなくなっていることである。個人主義も「集団主義」も、どちらもが、人間の存在とは何かをつきつめた結果生まれるものではなくなって、日常生活のなかの、単なる振る舞い方になってしまった。

日本的な精神は、半分の面に、深い個人主義をもっていたのではなかろうか。だから人間が自分の利害で動く近代以降の時代がはじまると、この個人主義が表面的な世界でb ハッキされるようになり、日本は他の国々よりも強く、現実的な個人主義が社会を覆うようになったと私は考えている。

伝統的な日本的精神とは、多層的精神という言葉に集約できるのではないか、と私は思っている。もっとも、このことは、これまで④日本人の精神のあいまいさとして語られてきたことなのだけれど、それをあいまいさとしてとらえたのは、c ゴカイだったのではなかろうか。そうではなく、さまざまなものを多層的に受け入れるところに、伝統的な日本的精神の特徴はあるのではないか、と。

たとえば、多くの人たちが宗教や信仰に対してとる態度にも、それを感じとることができる。私たちは、ときに仏教を受け入れ、また各地の神々を受け入れるばかりか、※道教や世界のさまざまな宗教までも、日々の暮らしのなかで受け入れる。なぜこのような、欧米人にはわかりにくい態度が生まれるのか。それは、日本人の宗教観があいまいだからではなく、受け入れる「精神の層」とでもいうべきものが、それぞれ違うからである。つまり、精神のなかのある層で仏教を受け入れ、また別の層で神々の世界を受け入れるといったことが、自然におこなわれている、といってもよい。

個人と共同性の関係でも、同じような受け入れ方がなされる。日本の人々の精神の一方には、「つきつめれば、生きるも死ぬも吾一人」という徹底した個人主義の精神があり、他方には共同体とともに生きる共同性を重んじる精神がある。この正反対に位置するふたつの精神が共存しえるのは、現実に生きている世界では、共同体とともに生きる非個人主義的な精神を受け入れ、現実を超越した純粋な生をみつめるとき、人々は、一人で生きるしかない個人主義的な精神を手にしていたからである。ここでも、このふたつの精神を受け入れる「精神の層」とでもいうべきものが異なっている。その結果、奥に個人主義を秘めた、現実には非個人主義的な共同主義が、日本では成立した。

考えてみれば私たちは、精神のある層では、合理的な考え方や論理的なものを受け入れながら、精神の別の層では、非合理的なもの、非論理的なものを受け入れている。受け入れる精神の層が違うから、それが矛盾をおこすことなく精神のなかで共存している。

伝統的な日本的精神の根幹をなす多層性は、精神を合理的知性に一元化してしまった近代人にとっては、わかりづらいものであったのだろう。だから、日本的な精神をあいまいなものとしてみる見方が生まれ、私たち自身もゴカイしてきたのであろう。

ところで、このような多層的な精神はなぜ生まれてきたのであろうか。私は、その根本にあるものは、やはり、日本的な自然と人間の関係ではないかと思っている。というのは、東アジアの※モンスーン地帯に位置する、日本的な自然とともに生きることは、自然の多層性を受け入れながら生きる精神をつくりだすこと、でもあったからである。

自然は、一面では、人間が暮らしていくもっとも重要な基盤である。その意味では、自然ほどありがたいものはなかったことだろう。ところが、この東アジアのモンスーン地帯の自然は、人間にとって都合のよいことだけを、してくれるわけではない。台風、豪雨、豪雪、さらに日本では大地震、噴火、津波――それらのものが、人々が長い時間をかけて築いてきた文明を、一瞬にして無に d―キしてしまうこともある。

すなわち、日本においては、自然はありがたいものであると同時に、ときに暴力であり、人間にとっては恐怖でもあった。ところが、それらもまた、すべてが困りものなわけではなく、たとえば豪雪や洪水の後には、それがゆえに豊かな自然もつくられる。

⑤この自然の多層性を受け入れていく暮らしが、伝統的な、多層的な精神をつくりだしていった基盤なのだと思う。だから自然と結びついた暮らしをやめたとき、多層的な精神も混乱するようになったのだ、と。

（内山　節『「里」という思想』より）

※道教……中国の伝統的宗教で、儒教、仏教と並ぶ三教の一つ。古代民間信仰にさまざまな思想が混ざって形成された。現世利益と不老長生を目的とする。

※モンスーン地帯……モンスーン（季節風）によって気候が支配される南アジアから東アジアにかけての地域。

問1　――線a～dのカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問2　空らん［A］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　具体化　　2　一体化　　3　現実化　　4　一面化

問3　――線①「集団主義的性格」とありますが、それはどのような精神にもとづいたものですか。文中から十字でぬき出しなさい。

問4　――線②「日本の伝統的な精神は、もっと多層的なものだった」とありますが、それはどのようなものですか。説明した次の文の空らん［X］（二字）、［Y］（六字）に入る最もふさわしいことばを文中からぬき出して答えなさい。

現実世界で共同体の一員として生きる「集団主義」と、［X］に生きる自己を見つめる「個人主義」の精神を［Y］させたもの。

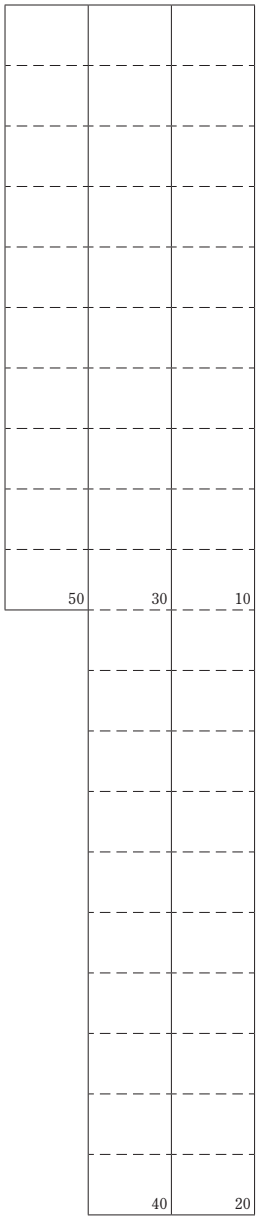
問5　――線③「徹底した個人主義」とありますが、これは自分の存在をどのようにみていることを表しますか。文中より二十字以内でぬき出しなさい。

問6　――線④「日本人の精神のあいまいさ」とありますが、筆者は「あいまいさ」をどういうこととしてとらえていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　精神がいろいろな層を持っていて、使い分けがされている、ということ。
2　問いかけに対して、日本人ははっきりとした返事をしない、ということ。
3　一方では仏教を信仰しながら、他方では神への信仰を持つ、ということ。
4　自分と同じように他人を思いやる気持ちがはたらいている、ということ。

問7　――線⑤「この自然の多層性を受け入れ」るとは、どういうことを表していますか。具体的な例をあげながら、五十字以内で説明しなさい。

（下書きらん）



問8　本文の内容としてふさわしいと考えられるものを次から二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1　近代以降人間は自身の利害を考えて自然を切り離すようになったため、今日では自然と人間との関わりを取り戻そうとする動きが活発化している。

2　現代では「個人主義」も「集団主義」も日常生活における単なるふるまいとなってしまい、伝統的な日本的精神の多層性は見失われてしまっている。

3　日本の伝統的精神がいたるところに浸透していることによって、自然の多層性を受け入れながらも多層的な精神をつくることが可能となっている。

4　日本的精神とは、共同体の一員として現実の世界に生きながら同時に現実を超越したところに個人としての存在を保っているということである。

5　精神を合理的知性に一元化した近代人は、日本の伝統的精神の多層性が理解できず、徹底した「個人主義」が社会を覆うようになってしまった。

（問題は次のページに続く）

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、《　　》は原文の内容を要約した部分です。また、設問の都合上、表記を改めたところと、本文を省略した部分があります。

《越前国の藩主松平忠直は、大阪夏の陣で手柄をあげたことで、祖父の家康から中国の伝説的な勇者にちなみ、「日本焚噲」の名で呼ばれる。自らを「人とは違う」と優越感にひたる忠直は、国元へ帰ってからは武術と酒宴に明け暮れる日々を送る。

きょうの昼間も槍の大仕合〔＝紅白にわかれて勝ち抜き戦を行い、最後に勝ち残った側が勝利する〕を行い、自らの活躍によって紅軍を勝利に導いた忠直は、得意の絶頂のなか美酒に酔いしれて、ひとり宴席を抜け出す。その忠直の耳に二人の話し声が聞こえてくる。》

忠直卿は、大名として生まれて初めて、立ち聞きをするという不思議な興味を覚えて、思わず注意を、その方へ集注させた。

二人は、四阿からは三間とは離れない泉水のみぎわで、立ち止まっているらしい。※左太夫は、心持ち声を潜めたらしく、

「時に殿のお腕前をどう思う？」と、きいた。

※右近が、苦笑をしたらしい気勢がした。

「殿のおうわさか！　聞こえたら切腹物じゃのう。」

「陰では公方のおうわさもする。どうじゃ、殿のお腕前は？　真実の御力量は？」と、左太夫は、かなり真剣にきいて、じっと息を凝らして、右近の評価を待っているようであった。

「さればじゃのう！　※いかい御上達じゃ。」と、言ったまま右近は、言葉を切った。忠直卿は、初めて臣下の偽らざる賞賛を聞いたように覚えた。が、右近はもっと言葉を続けた。

「以前ほど、勝ちをお譲りいたすのに、［X］が折れなくなったわ。」

二人の若武士は、そこで顔を見合わせて①会心の苦笑をしたらしい気勢がした。

右近の言葉を聞いた忠直卿の心のなかに、そこに突如として感情の大渦巻が声を立てて流れ始めたは無論である。

忠直卿は、生まれて初めて、土足をもって、頭上からふみにじられたような心持ちがした。彼の唇はブルブルとふるえ、惣身の血潮が煮えくり返って、グングン頭へ逆上するように思った。

右近の一言によって、彼は今まで自分が立っておった人間として最高の脚台から、引きずりおろされて地上へ投げ出されたような、②名状し難い衝動を受けた。

それは、確かに激怒に近い感情であった。しかし、心の中であり余った力が、外にハミ出したような激怒とは、全く違ったものであった。その激怒は外面は、さかんに燃え狂っているものの、中核のところには癒しがたいさびしさの空虚が、※忽然と作られている激怒であった。彼は世のなかが、急にたよりなくなったような、今までのすべての生活、自分の持っていたすべての誇りが、ことごとく偽りの土台の上に立っていた事に気が付いたようなさびしさに、ひしひしと襲わ

れていた。

忠直卿のそばに、さっきから置き物のようにじっとして、うずくまっていた聡明な小姓は、さすがにこの危機を十分に知っていた。二人の男に、ここに彼らの主君がいることを教えねば、どんな大事が起こるかもしれぬと思った。彼は、主君のすさまじい顔色をうかがいながら、二、三度小さいせきをした。

小姓の小さいせきは、この場合はなはだ有効であった。右近と左太夫とは、付近に人がいるのを知ると、ハッとしてその冒瀆な［　Y　］をつぐんだ。

二人は言い合わしたように足早く大広間の方へと去ってしまった。

忠直卿のひとみは、怒りに燃えていた。が、その頬はすさまじいまでに蒼ざめている。

彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言によって、物の見事に破産してしまっていた。彼が幼にして、遊戯をすれば近習のだれよりも巧みであった事や、破魔弓の的を競えば近習の何人よりも多くが命中矢を出した事や、習字のけいこの筆を取れば、祐筆の老人が膝頭をたたいて、彼の手跡を賞賛した事などが、③皆不快な記憶として彼の頭に一時によみがえって来た。

武術の方面においても、そうであった。剣を取っても、槍を取っても、たちまち相手をする若武士に打ち勝つほどの腕にまたたく間に上達した。彼は今まで自分を信じて来た。自分の実力をあくまで信じて来た。今右近らの冒瀆な陰口を耳にしても、それが彼らの 1負け惜しみであるとさえ、ともすれば思うほどである。

しかし、今日の右近の言葉は、その言葉が発せられた時と場合とを考えれば、決して冗談でもなければうそでもなかった。

自信に充ち満ちていた忠直卿の耳にも 2正真の事実として、聞こえぬわけには行かなかった。

右近の言葉は、彼の耳朶のうちに彫り付けられたように、残っている。

考えて見ると、忠直卿は今日の華々しい勝利のうちでも、どこまでが本当で、どこからがうそだかわからなくなった。否今日のみではない、生まれて以来幾度も試みた遊戯や仕合で、自分が占めた数限りのない勝利や、優越のなかで、どれだけが本物でどれだけがうそのものだか、わからなくなった。そう考えると、彼は心のうちをかきむしられるような、はげしい焦燥を感じた。彼とても、臣下のすべてから 3偽りの勝利を奪っているのではない。否そのうちの多くの者には、正当に勝っているのだ。それだのに右近や左太夫などの不埒者のいるために、自分の勝利が、すべて 4不純の色彩を帯びるに至ったのだと思うと、彼は今右近と左太夫とに対し、※旺然たる憎悪を感じ始めたのである。

が、そればかりではなかった。こうなると、つい三月ばかり前に、大阪の戦場に立てた偉勲さえ、なんだか怪しげな正体のわからぬもののように、忠直卿の心のうちに思われた。彼が、今まで誇りとしていた日本樊噲という称呼さえ、なんだか人をばかにしたような、誇張を伴うているようにさえ思われ出した。家臣どもから、いい加減に扱われていた自分は、お祖父様からも手軽に、あやつられているのではないかと思うと、忠直卿のひとみには、初めて不覚の涙がにじみ始

めた。

《翌日も、忠直の命により、昨日と同じ組分けで槍の大仕合が行われた。》

紅軍は、昨日よりもさらに旗色が悪かった。大将の忠直卿が出られた時には、白軍には、大将副将初め、六人の不戦者があった。

見物の家中の者どもが、不思議に思うほど、忠直卿は興奮していた。タンポの付いた大身の槍を、熱に浮かされた男のようにみだりに打ち振った。最初の二人は腫れ物にでも触れるように、※恟々として立ち向かった。が、主君のはげしい槍先にたちまちに突きすくめられて平伏してしまう。次の二人も、主君のすさまじい気勢におじ恐れて、ただ型ばかりに槍を振っただけであった。

五人目に現われたのは、大島左太夫であった。彼は今日の忠直卿の常軌を逸したとも、思われる振る舞いについて、かすかながら④杞憂をいだく一人であった。無論、彼は自分の主君が、自分たちの昨夜の立ち話を立ち聞きした当の本人であろうとは、夢にも思っていなかった。が、昨夜夜ふけの庭に耳にしたせきばらいの主が、主君に自分たちを※讒したのではあるまいかと、いうかすかな懸念は持っていた。彼は常よりもさらに粛然として、主君の前に頭を下げた。

「左太夫か！」と、忠直卿はある落ち着きを、示そうと努めたらしいが、⑤その声は妙に上ずっていた。

「左太夫！　槍といい剣といい、正真の腕前は真槍真剣でなければわからない！　タンポの付いた稽古槍の仕合は、所詮は偽りの仕合じゃ、負けても傷が付かぬとなれば、※仕宜によっては、負けても差しつかえがないわけとなる！　忠直は偽りの仕合にはもう飽いている。大阪表において手なれた真槍をもって立ち向かうほどにそちも真槍をもって来い！　主と思うに及ばぬ。すきがあらば遠慮いたさずに突け！」

忠直卿の目は上ずって、言葉の末がふるえた。左太夫は色を変えた。左太夫の後ろに控えている小野田右近も、左太夫と同じく色を変えた。

忠直卿は、これまで※癇癖にこそあったが、平常しごく※闊達であり、やや粗暴のきらいこそあったが、非道無残な振る舞いは※寸毫もなかったので、今日の忠直卿の振る舞いを見て家中の者が、色を変じたのも無理ではなかった。

《忠直が真槍を手にしたのを見て、長年仕えてきた国老が必死にそれをとめようとした。しかし、「止め立て一切無用」と忠直は、まったく聞く耳を持たなかった。》

左太夫は、もうさっきから十分に覚悟をしていた。昨夜の立ち話が、殿のお耳に入ったための御成敗かと思えば、彼には何とも文句の言いようはなかった。それは家来として当然受くべき成敗であった。それをかかる真槍仕合に、かこつけての成敗かと思えば、彼はそこに忠直卿の好意

をさえ感ずるように思った。彼は主君の真槍に貫かれて潔く死にたいと思った。

「左太夫、いかにも真槍をもって、お相手をいたしまする。」と、思い切って言った。見物席に左太夫の不遜に対する叱責の声がもれた。⑥忠直卿は苦笑をした。

「それでこそ忠直の家臣じゃ。主と思うな、すきがあれば、遠慮いたさず突け！」

こう言いながら、忠直卿は槍を扱いて二、三間あとへ退りながら、位を取られた。

左太夫も、真槍の鞘を払い、

「御免！」と、叫びながら主君に立ち向かった。

一座の者は、すさまじい殺気に閉じられて、※身の気をよだち、息を詰めて、ただ茫然と、主従の決闘を見守るばかりであった。

忠直卿は、自分の本当の力量を、如実にさえ知ることができれば、思い残すことはないとさえ、思い込んでいた。従って国主という自覚もなく、対手が臣下であるという考えもなく、ただ勇気凜然として立ち向かわれた。

が、左太夫は、最初から覚悟をきめていた。三合ばかり槍を合わすと、彼は忠直卿の槍を左の高股に受けて、どうと地響き打たせて、のけざまに倒れた。

見物席の人々は一斉に深いため息をもらした。左太夫の傷ついたからだは同僚の誰彼によって、たちまち運び去られた。

左太夫が倒れると、⑦右近は少しもわるびれた様子もなく、蒼白な顔に覚悟のひとみを輝かしながら、左太夫の取り落とした槍をひっさげてそこに立った。

忠直卿は、右近め、昨夜あのように、思い切った言葉を吐いた男であるから、必死の手向かいをするに相違ないと、⑧消えかかろうとする勇気を鼓して立ち向かった。

が、この男も左太夫と同じく、自分の罪を深く心のうちに感じていた。そして、潔く主君の長槍に貫かれて、自分の罪を謝そうとしていた。

（菊池　寛『忠直卿行状記』より）

※左太夫……忠直の臣下で、槍を得意とする。白軍の副大将をつとめたが、忠直に一気に突き伏せられた。
※右近……忠直の臣下で、屈指の槍の使い手。きょうの大仕合で白軍の大将をつとめた。
※いかい……はなはだしくの意。
※忽然と……突然。
※旺然……盛んなようす。
※恟々として……おどおどしながら。
※讒……悪口をいうこと。
※仕宜……仕儀。事のなりゆき。
※癇癖……怒りやすい性質。
※闊達……物事にこだわらないこと。
※寸毫……きわめてわずかなこと。
※身の気をよだち……「身の毛がよだち」と同じ。

問1　空らん［X］・［Y］にそれぞれ漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

問2　――線①「会心の苦笑をしたらしい」とありますが、これは「二人の若武士」のどのような気持ちを表していると考えられますか。最もふさわしいものを、次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　ほかの人たちに聞かれることがなかったとはいえ、主君のうわさをしたことに対して罪の意識を感じている。
2　主君が思いのほか腕を上げていることを喜び、自分たちの努力が報われていることに安堵感をおぼえている。
3　これまで口には出せなかったが、互いに主君に対して抱く思いは同じであることがわかり納得しあっている。
4　一方は相手の本音を聞き出したことに満足し、もう一方は思いがけず主君をけなしたことに後悔をしている。

問3　――線②「名状し難い衝動を受けた」とありますが、このときの忠直の気持ちを説明したものとして最もふさわしいものを、次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　周囲の偽りに満ちた評価を何の疑いもなく信じこんでいたという、言い訳できないほどの恥ずかしさを感じた。

2　自分のより所である絶対的な優越感を傷つける、悪意に満ちた中傷に対してことばにならない怒りを感じた。

3　臣下の立場でありながら、主君である自分をあからさまに非難していることに対しての激しい嫌悪感をもった。

4　言いようのない怒りと同時に、心がうつろになって何もかもが信じられなくなるような深い不信感をもった。

問4　――線③「皆不快な記憶として彼の頭に一時によみがえって来た」とありますが、忠直卿の不快さと**関わりがないもの**を文中の――線1～4から一つ選び、その番号で答えなさい。

1　負け惜しみ　　2　正真の事実　　3　偽りの勝利　　4　不純の色彩

問5　――線④「杞憂をいだく」は、ここでは「何かを心配する」という意味になりますが、「杞憂」の具体的な内容が述べられている部分を文中から五十字でぬき出し、はじめとおわりの二字で答えなさい。

問6　――線⑤「その声は妙に上ずっていた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　忠直卿は左太夫よりも自分の力が上だと思っているので、人々がそれに気づかないことにいらだちを感じているから。

2　忠直卿は主君としての器量を示したいと思っているが、いつも以上に落ち着いている左太夫を前に動揺しているから。

3　忠直卿はつとめて冷静であろうとしているが、これから自分が切り出そうとすることの重大さを意識しているから。

4　忠直卿はまったく自分に勝ち目がないことを自覚しているので、その恐れを無理矢理ふりはらおうとしているから。

問7　――線⑥「忠直卿は苦笑をした」とありますが、これはどのような意味の苦笑ですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　左太夫と真剣勝負をしたいのに、周囲がそれを理解してくれないことへの苦笑。
2　申し出は拒否されると思っていたのに、案に相違して承諾した左太夫への苦笑。
3　自分の実力が認められていないことを自覚した忠直の、自分自身に向けた苦笑。
4　昨夜大口をたたいた左太夫が、今はひどくおとなしくなっていることへの苦笑。

問8　――線⑦「右近は少しもわるびれた様子もなく」とありますが、ここからは右近のどのような決意が読み取れますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　右近は自らの命をかけて、この主君の無謀な行為をいさめようと決意したということ。
2　何も恥じることはない右近は、仕合を通してそれを証明しようと決意したということ。
3　忠直の思いを理解した右近は、何があろうとも実力を出しきる決意をしたということ。
4　右近は自分の信ずるところに従って、己の役割をまっとうする決意をしたということ。

問9　――線⑧「消えかかろうとする勇気」とありますが、このときの忠直について言えるのはどういうことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　悪びれたようすが右近には見られないので、彼を悪として憎んでいた気持ちが、畏敬の念にかわってしまったということ。
2　ひたすら本当のことを知りたいと望んでみたが、それを知ることは、とうていかないそうもないと感じているということ。
3　右近が本当の力を出して自分に挑んでくれれば、もしかすると自分は命を落とすことになるかもしれないと感じたということ。
4　家臣を思いのままに成敗することが、いったいどれだけ意味のあることなのか、自分でわからなくなってきたということ。

問10　次の1～5は、「忠直卿」について説明したものですが、ふさわしい内容のものを**二つ**選び、番号で答えなさい。

1　徳川家康の孫として生まれ、幼いころから何をやっても人より優れ、負けることがなかった彼の自信と優越は、右近や左太夫などの不埒者を罰することでしか守ることのできないものであった。

2　物事にあまりこだわることがなく、少しも道理にはずれることなどないかのようによそおっているが、もともと怒りやすく乱暴なところがある忠直は、家臣たちからまったく信頼されなかった。

3　本当の自信がないため、周囲の言動で冷静さを欠いてしまうようなもろさを持つ反面、自分がこうしようと決めたことは、どんな犠牲を払っても実現させようとする頑固さを持ち合わせている。

4　はじめ忠直が右近と左太夫の話を立ち聞きしようとしたのは、話の内容に興味をもったからであった。しかし話を聞くうちに、最後は立ち聞きなどしなければよかったという後悔だけが残った。

5　右近と左太夫の会話によって、家臣たちばかりか祖父の家康に対してまで不信感を抱くようになった忠直は、真槍の勝負という場を作ることによって、望むものを手に入れようと覚悟を決めた。

3　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい

私のカメラ　　茨木のり子

眼
それは　レンズ

まばたき
それは　わたしの　シャッター

髪でかこまれた
①小さな小さな　暗室もあって

だから　わたし
カメラなんかぶらさげない

ごぞんじ？　わたしのなかに
あなたのフィルムが沢山しまってあるのを

木漏れ陽のしたで笑うあなた
②波を切る栗色の眩しいからだ

煙草に火をつける　子供のように眠る
蘭の花のように匂う　森ではライオンになったっけ

世界にたったひとつ　だれも知らない
わたしのフィルム・ライブラリイ

（『現代の詩人7　茨木のり子』より）

問1　この詩で**使用されていない**表現技法の組み合わせを後から一つ選び、番号で答えなさい。

ア　倒置法　　イ　リフレイン（反復法）　　ウ　擬人法　　エ　呼びかけ

オ　対句法　　カ　直喩

1　ア・エ　　2　イ・ウ　　3　オ・カ　　4　ア・オ　　5　ウ・カ

問2　この詩を内容から二つに分けるとすると、後半のはじまりはどこですか。はじめの三字を答えなさい。

問3　――線①「小さな小さな　暗室」とは実際には何を指していますか。漢字一字で考えて答えなさい。

問4　――線②「波を切る栗色の眩しいからだ」とありますが、これは「あなた」のどのような様子を表していますか。それを説明した次の文の空らん［1］・［2］に入ることばをそれぞれ五字以内で考えて答えなさい。

［1］からだで［2］様子。

問5　この詩の主題として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　世間の人々が「カメラ」に頼っていることへの警鐘。

2　人々のいろいろなシーンを思い出させる「カメラ」の利点。

3　「わたし」の「あなた」に対するあふれんばかりの愛情。

4　自分の気持ちをわかってくれない「あなた」への反抗。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 例にならって空らんをうめ、作品名を答えなさい。ただし、すべてひらがなのみで答えるものとします。

例 芥川龍之介の小説。『今昔物語集』に題材をとり、荒廃した都を舞台に、生きるために悪を行う「下人」を通し、人間のエゴイズムを描いた作品は「らしょうもん」。

① アメリカのボームの小説。少女ドロシーが、かかしやブリキのきこり、ライオンとともにオズの支配する国を旅する物語は「オズの□」。

② イギリスのローリングの小説。主人公ハリーポッターと宿敵ヴォルデモートの戦いを描いた物語。そのシリーズの最初の作品は「ハリーポッターと□」。

③ デンマークのアンデルセンの小説。この作品をもとにして、エルサとアナの姉妹を主人公とした映画「アナと□」が作られた。

④ フランスのデュマの小説。銃士を目指すダルタニャンが主人公。彼と共に活躍するアトス、ポルトス、アラミスを「□」と呼び、作品名にもなっている。

問2 問1の①～④の□の八字を並べかえると、「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」という有名なことばが出てくる作品になります。この作品名をひらがなのみで答えなさい。